ISSN 1883-3179

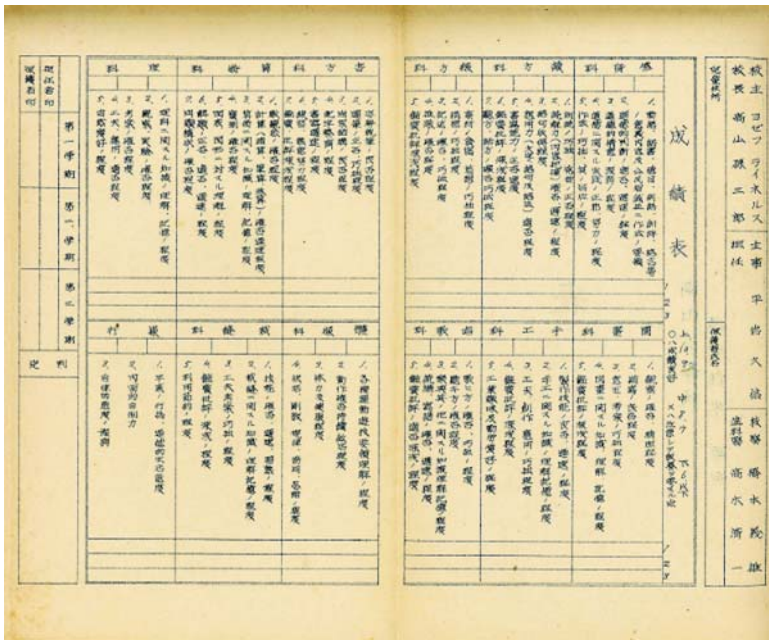
南山アーカイブズニュース

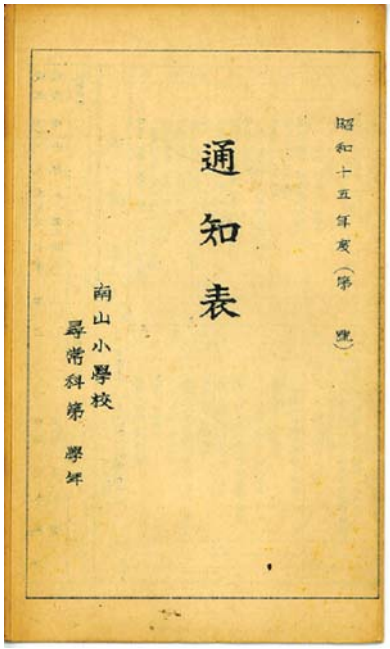
Nanzan Archives News

第 1 号　2008 年 11 月 1 日

目　次

◇ 刊行の言葉……濵口吉隆……2
◇ 私とアーカイブズ
……ハンス ユーゲン・マルクス……3
◇ 史資料紹介……會澤俊三……4
小さな一枚のセピア色の写真を拡大すると
そこには「HOLY GHOST ACADEMY」の門札
捜していた学園名の横文字が浮き出てきた
◇ 南山発見……林 雅代……6
占領下のパッヘ神父と名古屋市民
◇ 記念誌・史料集などの紹介 1……8





南山小学校の通知表　1940 年度

南山小学校は 1936 年 4 月に第 1 回入学式を行うが、1941 年 3 月に閉校した。（南山学園史料室所蔵）

刊　行　の　言　葉

濵口吉隆

南山学園は 2007 年 11 月 1 日に創立 75 周年を迎え、各単位校と執筆者たちの協力を得て『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立 75 周年記念誌』を刊行することができました。この記念誌の編纂が企画された当初から、全単位校の構成員と同窓会の皆様に向けて発行されたのが、広報誌『75th Anniversary Nanzan Archives News』(vol. 1 ～ 9. 2003 年 4 月～ 2008 年 3 月) でした。

75 周年記念誌編纂委員会は 2008 年 1 月 28 日に開催された第 12 回の会議をもってその任務を終えました。

しかし、この記念誌を編纂する過程において浮上し構想されたのが、2008 年 4 月 1 日付けで発足した学園史料委員会です。同年 6 月 16 日開催の第 1 回学園史料委員会において先の広報誌を引き継ぐものとして承認されたのが、この『南山アーカイブズニュース』です。

学園史料委員会は学園史料室と大学史料室との緊密な連携の下に学園の各単位校の教育・研究・社会活動に関する史資料を収集、整理、保管して、それを活用するために設置されました。そのために、各単位校から推薦された専任教育職員と職務上委員となる事務職員のみならず、学園の設立母体である神言会と聖霊会からも委員に加わっていただきました。

この広報誌には学園と各単位校のそれぞれの歴史的背景を物語る史資料が紹介されるでしょうし、75 周年を機に復活・開校された南山大学附属小学校から大学までの「総合学園」としての一貫教育・研究活動の姿を、新たな側面からより鮮明に描き出す一助となることを願っています。

75 周年記念誌を編纂した段階では、未整理の史資料がまだ数多く残されているのが実情です。各単位校においてもそれぞれの教育の足跡を辿るためだけでなく、これからも、学園の建学の精神に基づいて創造的に新たな歩みを展開してゆくためにも史資料の重要性を再認識し、その収集、整理、保管、活用という地道な作業を継続されることを切に望みます。そのような作業の過程で新たに発掘され蓄積される史資料を共有し、学園の歴史が異なる視点から解読される喜びを共に味わうことができますように。

（南山学園史料委員会委員長、南山大学人文学部キリスト教学科）

私とアーカイブズ

ハンス ユーゲン・マルクス

国民学校７年生だった頃、教皇ヨハネ 23 世はカトリック教会の改革のため、およそ 90 年ぶりの公会議開催の意向を公にし、これが中世以来分裂しているカトリック教会と東方正教会との合同につながればとの思いで、東方正教会側からオブザーバーを招きたいと表明した。合同の実現は未だならずこれからの課題だが、実際にオブザーバーは参加したし、次の教皇パウロ６世と東方正教会の首長である世界総主教アテナゴラス２世は公会議閉幕前夜、1054 年の夏にそれぞれの代表によって交わされた相互破門の無効を宣言した。

実は、カトリック教会と東方正教会の合同を実現しようとした最後の本気な取り組みはビザンティン帝国没落（1453 年５月 29 日）の 15 年前に双方の代表が参加してフィレンツェで開かれた公会議だった。ビザンティン帝国没落後、その後継者と自負するロシア帝国の台頭ということもあって、公会議の議事録などの関連資料の信憑性はずっと問題であったが、第二ヴァティカン公会議の計画によって、資料の改訂版公刊の研究が一気に加速した。中心はローマにある教皇庁立東方研究所であった。ちなみに現在の世界総主教バルトロメオス１世もそこで学位をとったことからも分かるように、その研究所はカトリックを超えた研究環境を提供している。

第二ヴァティカン公会議終了の３年後に来日した私は、1972 年の春南山大学を卒業して、神学博士号を取得するためにローマにある教皇庁立グレゴリアナ大学で勉強することになった。在日留学生という立場で痛感したのは、まったく異なる文化の中でキリスト教信仰を解き明かすことがいかに難しいかということだった。フィレンツェ公会議は、まさにそれぞれ異なる伝承を継承しているラテン語圏の西方キリスト教とギリシャ語圏の東方キリスト教との真摯なやり取りの最後の機会であったので、自分がこれを真面目に研究すれば異文化交流のときに何が問題になりうるか、それをどう解決したらよいか、一つのケーススタディになるかもしれないと思い、研究テーマをフィレンツェ公会議にしようと決心した。幸い、公式資料の改訂版の公刊はその時点でほぼ完了したところだった。大学院一年次に故郷でカトリック司祭に叙階されたとき、前述の公開資料を手に入れたいと思い、通常叙階のお祝いとしていただく司祭の衣装や道具等のプレゼントの代わりに現金を寄付して欲しいと親族に伝えた。皆が快く了解してくれたので、購入代金全額が賄えるほどの寄付が集まった。

今回、南山大学史料室編集の『南山アーカイブズニュース』に自身の研究資料について一文をとの依頼を受けたが、こうした事情で学位論文作成のためには、あまり史料室を使うことはなかったというのが正直なところだ。ただし、すべての資料が手元にあったわけではないので、特に先に述べた教皇庁立東方研究所の図書館のお世話になった。

資料関連で一番印象深いのは、学位論文がめでたく完成して、友人のファウゾーネ神父と一緒にフィレンツェのラウレンティアーナ図書館を訪れた時のことである。そこに保管されている羊皮紙に書かれたフィレンツェ公会議の合同憲章の原文を見たいと申し込み、粘り強い交渉の結果、やっと見せてもらえることになった。４人の係員に伴われて小部屋に案内された二人の前に、1m^2 以上の大きさのガラスに覆われた合同憲章の現物が運び込まれた。そこにはビザンティン帝国の最後から二代目の皇帝ヨハネス８世をはじめ、資料研究によって身近になった各参加者の署名がずらりと並んでいた。それを目にした時の感動は、今でも鮮やかに思い出される。

（南山学園理事長、南山大学付属小学校長）

史資料紹介

小さな一枚のセピア色の写真を拡大すると そこには「HOLY GHOST ACADEMY」の門札 捜していた学園名の横文字が浮き出てきた

會澤俊三

聖霊奉侍布教修道女会は、1947 年 11 月、女子教育のため、進駐軍から名古屋城三の丸の旧野砲兵第三連隊敷地角（現愛知県警察本部）の旧兵舎 1 棟を借用した。

それは、昭和区八事の聖霊会修道院で 1935 年開設の編物刺繍教室と手芸研究室の事業を継承し、さらに、より整えられた女子高等教育を、名古屋市の中心部で展開する意図をもつものであった。

この使命達成のため、1948 年 2 月、この旧兵舎に南外堀聖霊会支部修道院を設置し、本科、専修科を擁する教育機関を開設したのである。

その教育機関が、Holy Ghost Academy と呼ばれたことは、英文・独文史料および聞き取り調査によって確認されていたが、公式の名称であったか確定は難しかった。

2005 年 3 月、名古屋聖霊短期大学は閉学した。35 年間、瀬戸キャンパス校門に掲げてきた名古屋聖霊短期大学の門札も下ろされた。そんな中で、学校史『一粒の麦は地に落ちて―名古屋聖霊短期大学 35 年の歩み―』の編纂作業も、残すは口絵写真の割り付けという最終段階にまで来ていた。

前列左から：　Sr. Beata Christina 吉永 はな / Sr. Edeltruda Martha Kreuz / Sr. Theresilda M.Theresia Tüllmann / Sr. Teofana Theresia 後藤 治子 / カトリック名古屋教区長 松岡孫四郎 /Sr. Lucida Berta Gilb / Sr. Irene Maria Reiter / Sr. Hildeberta Anna Weig / Sr. Pia Anna Heimgartner

口絵の第 1 頁の小見出しに「名古屋聖霊学園の創立に向けて」と書き入れ、1948 年撮影の小さな 1 枚の写真を割り付けてみた。名古屋城三の丸旧兵舎玄関前に立ち並ぶ今は亡き聖霊会修道女たちの 54 年前の姿を、次いで、屋根・天窓・門柱など玄関の構造を、私の目はじっくりと順を追って勘査していた。そのとき、脳裏に閃きが走り、私は思わず拡大鏡を手にして、門柱に掛けた表札看板の文字に焦点を合わせていた。「聖靈學園」と読める。とりあえず複写機で拡大してみる。縦書きの「聖靈學園」の傍に「聖靈修道院附屬」の文字が、そして下方には、判読し難いが、確かに横文字が浮き出て来た。しばらく、横文字の判読に頭脳はフル回転した。「HOLY GHOST ACADEMY」と読めるではないか！

それまで、更なる確証を捜し求めていた聖霊学園の英語名が、紛れもない旧兵舎門札上に厳然と確認でき、さらに、設立当初の修道女たちの氏名・容姿をも確認できたことは、大きな発見であり喜びであった。

■ Holy Ghost Academy の名称について

Missionskongregation der Dienerinnen des Heiligen Geistes（聖霊奉侍布教修道女会）〔独〕は、1889 年オランダに創立され、丁度百年前の 1908 年に最初の日本派遣会員 5 人が渡来し、秋田において、幼稚園・女子職業学校に始まる聖霊学園を創設した。爾来、このドイツ語 Heilige Geist ＝聖霊の英訳として「Holy Ghost」が長らく使用されてきたのであるが、今日では、修道会の教皇庁認可の正式ラテン語名 Congregatio Missionalis Servarum Spiritus Sancti から Holy Spirit の英訳が使用されている。1948 年の段階では、まだ、Congregation of the Missionary Sisters, Servants of the Holy Ghost、そして Holy Ghost Academy と Ghost の語が使用されていたのである。

「Academy」の語は、聖霊会修道女来日時のヨーロッパでは、一般に学問・芸術に関する公私の指導団体の意で用いられており、南山学園創立者ライネルスは 1931 年のドイツ語圏広報誌に、南山中学校（旧制）を、Akademie と表記した。したがって、聖

霊会が Holy Ghost Academy と称したのは自然なことであった。

借用の旧兵舎左翼を修道院の居住区域、右翼を教室区域と分け、左翼玄関の門柱に「聖靈修道院附屬　聖靈學園　HOLY GHOST ACADEMY」の門札が掲げられたのである。

1948 年、財団法人名古屋聖霊学園設立の端緒となった聖霊奉侍布教修道女会の女子教育事業の名称、「聖靈修道院附屬　聖靈學園　HOLY GHOST ACADEMY」を、その後取り壊された旧兵舎の玄関門札に、それも、幸いにも聖霊会八事本部修道院史料室に保存されていた 1 枚の小さなセピア色の記念写真から、偶然にも、確認することができた。この再確認に基づき、執筆中であった関連の原稿を補足精査することができた。

ここに掲げた 1 枚の写真は、2005 年 12 月 25 日発行の『一粒の麦は地に落ちて―名古屋聖霊短期大学 35 年の歩み―』の巻頭の口絵第 1 頁の中央に収められた。さらにまた、2007 年 11 月 1 日に発行された『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007　南山学園創立 75 周年記念誌』の口絵にも収録された。

小さな写真が歴史的事実を確定する史料となることもある。これは、写真の重要性を再確認する事例である。これを機会に、記録写真史料保存の重要性が再認識され、廃学の名古屋聖霊短期大学の校舎取り壊しの記録写真と瀬戸キャンパス校門の門札の写真も撮影保存することとした。

（南山学園史料編纂委員会委員、元名古屋聖霊短期大学長）

南　山　発　見

占領下のパッヘ神父と名古屋市民

林　雅代

私はここ数年、主に名古屋周辺に駐留する米軍人のための教育機関として 1953 年に開設された、南山大学インターナショナル・ディヴィジョンについて研究している。これまで占領期研究とはほぼ無関係に過ごしてきたのであるが、ここへ来て、インターナショナル・ディヴィジョンの開設や運営の背景にある、占領下の名古屋の状況や駐留米軍について、勉強する必要性に迫られることになった。手がかりを求めて文献探索を行う中で、中西董著『名古屋戦乱物語』（文芸社、2005 年）を見つけ、早速入手して読んでみた。

本書は、終戦時に旧制中学３年生であった著者が、自身の体験や、留学等での滞米経験を買われて占領軍の特別通訳官となった父から見聞きした事柄なども交えながら、占領期の名古屋の状況を記したものであり、1994 年に刊行された『米英軍占領下の名古屋』（日本近代郷土史研究所刊）のダイジェスト版である。

副題に「米英軍占領下に生きた人びと」とあるように、占領下の名古屋に生きていた人々が、米英軍（英軍の名古屋進駐は、名古屋市史等にも記載がないということだが、規模もあまり大きくなく、ごく形式的なものであったにせよ、事実として行われたという。ただし、やはり占領の実質は米軍によって行われたといえる）による占領の行われていた時期、どのような経験をしていたかが明らかにされている。占領軍の絶対的な権力の下、食糧を中心とした物資の不足をはじめとした生活難や、米兵らの理不尽なふるまいに堪え忍びつつも、したたかに生きる名古屋市民の姿が描き出されているのである。

本書の中で多くの紙数が割かれているエピソードの一つが、「B29 撃墜死亡搭乗員虐待戦犯事件」である。これは、1945 年３月、日本軍の高射砲弾によって撃墜された B29 米軍爆撃機が、名古屋市昭和区御器所に墜落し、墜落機の搭乗員の遺体に危害が加えられたという事件である。著者はその墜落現場を見に行き、そこで墜落した機体の翼に並べられた米兵の遺体が、多くの市民の目に晒され、遺体に殴る蹴る等の虐待を加えられる様子を目撃した。この事件は、それ以後名古屋への空襲が激しさを増すにつれ忘れ去られていたが、敗戦を迎えて、改めて大きな問題として浮上することになった。交戦国の軍人や捕虜に対する虐待を行った者は、「BC 級戦犯」として軍事裁判にかけられるためである。名古屋への進駐開始直後より、米軍がこの事件に強い関心を持っていることを知った著者の父は、戦犯として多数の市民が逮捕される事態を恐れて、愛知県知事福本柳一（当時）に進言し、米兵の遺体を丁重に扱ったものとみせかけるための偽装工作を行ったのである。

続く下りを読んで私が驚いたのは、その偽装工作に、のちに南山大学初代学長となるアロイジオ・パッヘ神父が関わっていたという記述である。本書によれば、米軍第 25 師団本隊の上陸直前の 1945 年９月末、あたかも同年３月の撃墜直後に行われたかのように装った埋葬の儀式やその後の墓参の様子の撮影が行われ、パッヘ神父は冬用の拝礼服で聖書を読んだ。そして、軍事裁判の予備審理が始まると、米兵の遺体は丁重に葬られたとする偽装写真が、証拠として提出された。しかし、撮影された季節が異なるはずの各写真に写った墓標の影の位置が、どれも同じであったことから、偽装はあっけなく見破られ、

事態は悪化するかと思われた。

ところが、その後事態は一転し、軍関係者以外の一般市民の戦犯容疑追究は打ち切られたのである。それは、事件の全責任を負った高射砲部隊長の自決という、痛ましい出来事によってであった。このとき、パッヘ神父は、米軍による厳しい尋問を受けてついに偽装工作を自白し、自らの命と引き替えに名古屋市民を守ろうとする行動に出ようとしたという。

本書の元となった『米英軍占領下の名古屋』の刊行後、「B29 撃墜死亡搭乗員虐待戦犯事件」の顛末が、毎日新聞や朝日新聞で報道された。毎日新聞で、著者の父である中西司馬治氏とパッヘ神父が、顔写真入りで紹介されたことを、ご記憶の方もあるかもしれない。

偽装工作に携わったパッヘ神父の心中がどのようなものであったのか、今となっては知る手がかりはない。おそらく、パッヘ神父をはじめとする当事者たちは、実に深刻に事態を受け止め、真剣に対策を考案したのは間違いないことであろう。本書は、これを、名古屋市民を守るための一途な行為と理解する。それはおそらく、同時代を生きた人々の率直な思いであろうが、もちろん異なる立場からは、別の評価もありえよう。ただし、ここで注目したいのは、そうした、事件に対するパッヘ神父の関与についてではなく、このような関与の背景をなしたと考えられる、南山学園関係者が占領期の名古屋に果たした役割である。

『南山学園史料集 名古屋外国語専門学校史料集』（南山学園創立 75 周年記念誌編纂委員会編、2005 年）や『南山学園史料集 2 名古屋聖霊学園史料集 第 1 編』（同、2006 年）に掲載の諸史料からも見て取れるように、南山学園関係者は、占領軍関係者と緊密な関係にあり、学校経営にあたってさまざまな便宜を受けうる位置にあった。

南山学園関係者と占領軍関係者は、キリスト教という基盤に加えて、英語によるコミュニケーション、日米の情勢や両国を取り巻く世界情勢についての認識を共有しえた存在であった。両者の関係は、南山学園関係者にとって、メリットであっただけでなく、占領をスムーズに進める上で、通訳官などの人材を確保することが不可欠であった占領軍にとっても、メリットであったにちがいない（この点、本書第 4 章を参照）。そしてまた、占領軍との交渉をスムーズに進めたい名古屋市の行政関係者にとっても、南山学園関係者は都合がよかったことであろう。宗教と教育を専らとするアポリティカルな存在としての南山学園関係者は、占領軍と名古屋市民との間で、極めてポリティカルにふるまいえた存在でもあったのである。

ところで、南山学園関係者と占領軍との接触は、いったいいつ、どのように始まったのであろうか。先述の 2 冊の史料集に掲載されている史料はほぼ、1946 年以降のものであることにも示されているように、学校開設に向けての動きが本格化したこの時期以降、両者のフォーマルな接触が頻繁であったことは疑いえない。一方、インフォーマルな接触についてはどうであろうか？　ひょっとすると、本書に紹介された「B29 撃墜死亡搭乗員虐待戦犯事件」へのパッヘ神父の関与が、両者の間の、初期のインフォーマルな接触の一つであったのかも知れない。このエピソードが、両者の間に抜き差しならない関係をもたらしたと見るのは、穿ち過ぎであろうか。

いずれにせよ、米軍人を主たる受講者としていた、南山大学インターナショナル・ディヴィジョンという特殊な教育機関の存在を考えるとき、占領下の名古屋での南山学園関係者の位置づけを想起することは、不可欠ではないかと思うのである。

（南山大学人文学部心理人間学科）

≪記念誌・史料集などの紹介 1 ≫

1. 南山学園創立 75 周年記念誌編纂委員会編『HOMINIS DIGNITATI 1932-2007 南山学園創立 75 周年記念誌』2007 年 11 月 1 日、南山学園
   1932 年の 旧制南山中学校の発足以来、今日の南山学園にまで成長・発展してきた過程を叙述。
2. 南山学園創立 75 周年記念誌編纂委員会編『南山学園史料集 名古屋外国語専門学校史料集』2005 年 4 月 20 日、南山学園
   南山大学の前身である名古屋外国語専門学校の設立認可（1946 年）から廃止（1951 年）までをまとめた史料集。
3. 南山学園創立 75 周年記念誌編纂委員会編『南山学園史料集 2 名古屋聖霊学園史料集 第一編』2006 年 8 月 28 日、南山学園
   名古屋聖霊学園の法人設立から、校地取得に関する史料を年代順に収録した。
4. 南山学園創立 75 周年記念誌編纂委員会編『南山学園史料集 3 南山大学インターナショナル・ディヴィジョン史料集 上』2008 年 3 月 10 日、南山学園
   南山大学インターナショナル・ディヴィジョンの開設から、組織的な発展までの関連史料を収録した。
5. 南山大学 50 年史作成小委員会編『南山大学五十年史』2001 年 3 月 31 日、南山大学
   南山大学 50 年と前身校などの歴史を叙述した。
6. 南山大学 50 年史作成小委員会編『南山大学五十年史 写真集』1999 年 10 月 15 日、南山大学
   南山大学と前身校などの歴史を写真でたどった。
7. 南山大学史料室運営委員会編『アルケイア―記録・情報・歴史―』第 1 号、2007 年 3 月、南山大学史料室
   南山大学史料室の紀要。
8. 南山大学史料室運営委員会編『アルケイア―記録・情報・歴史―』第 2 号、2008 年 3 月、南山大学史料室
   南山大学史料室の紀要。
9. 『南山高等・中学校 創立 70 周年記念写真集』2004 年 3 月 1 日、南山高等・中学校
   1932 年の旧制南山中学校の設立からの写真を年代順に収録した。
10. 創立百周年準備委員会『聖霊奉待布教修道女会 創立百周年記念誌』1989 年 11 月 3 日、聖霊奉待布教修道女会
    聖霊奉待布教修道女会創立 100 年記念に当り、日本管区 80 年の歩みを写真とともに叙述した。
11. 『聖霊の愛に燃えて 今を生きる ―管区 100 年の歩み―』2008 年 2 月 29 日、聖霊奉待布教修道女会
    聖霊奉待布教修道女会日本管区創立 80 周年以降に焦点を当てて、写真とともに叙述した。
12. 名古屋聖霊短期大学 35 年史編纂委員会編『一粒の麦は 地に落ちて―名古屋聖霊短期大学 35 年の歩み―』2005 年 12 月 25 日、名古屋聖霊短期大学
    名古屋聖霊短期大学の開学（1970 年）から閉学（2005 年）までを豊富な写真や史料を交え叙述した。

南山アーカイブズニュース　第 1 号
Nanzan Archives News

発行日　2008 年 11 月 1 日
編　集　南山大学史料室
　　〒 466-8673　名古屋市昭和区山里町 18
発　行　南山学園史料委員会
　　〒 466-0838　名古屋市昭和区五軒家町 6
印　刷　株式会社 クイックス
　　〒 456-0004　名古屋市熱田区桜田町 19-20